

## 比較文化論 : 大項目別報告 : 流通・交換 1500

著者	竹村 卓二
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	55-60
発行年	1990-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003656">http://doi.org/10.15021/00003656</a>

## 流通・交換 1500

竹 村 卓 二\*

- |                |                        |
|----------------|------------------------|
| 1. まえがき        | 4. (貨幣としての) 子安貝 (1503) |
| 2. 物々交換 (1501) | 5. 常設市場 (1507)         |
| 3. 鑄造貨幣 (1502) | 6. 定期市 (1508)          |

### 1. ま え が き

筆者が担当したのは、大項目番号1500の《流通・交換》である。さらにこれは《物々交換》(1501)以下9個の小項目に再区分されている。以下各小項目について、「民族・文化項目マトリックス」及び「文化項目分布図」に基づき、若干のコメントを試みたい。なお今回は、当面特に重要と思われる《物々交換》(1501)、《鑄造貨幣》(1502)、《(貨幣としての)子安貝》(1503)、《常設市場》(1507)、《定期市》(1508)、以上5項目にコメントの対象を限定したことをあらかじめことわっておきたい<sup>1)</sup>。

### 2. 物々交換 (1501)

1) まず最初に気づくことは、北タイの山地民族の中で、Yao, Miao, Akhaのもとに物々交換が見られないことである。これは、彼らの間にかなり早くから貨幣経済が普及していたことを暗示する。事実、1970年代前半にこの地域の Yao の経済生活を調査した量博満は、「貨幣経済下にある山地種族間では、物品の交流があっても、決して物と物との直接交換ではなく、必ず貨幣を通じた売買交渉である」(強勢竹村)[量 1978: 173]と報告しており、上述の暗示を裏づけている。

2) 一方、同じく北タイの Mrabri は、独特の物々交換を行なうことで知られてい

\* 国立民族学博物館第1研究部

1) 今回取り上げるにいたらなかった4小項目、すなわち《石貨》(1504)、《(貨幣としての)貝殻ビーズ》(1505)、《(貨幣としての)むしろ(パンダナス)》(1506)、《(行商人)》(1509)については、コメントすべき内容がまとまり次第、機会を改めて報告する所存である。

る<sup>2)</sup>。例えば、ベルナツイック (Bernatzik, H.) は、彼らが自民族同士では交易を行なわず、Miao, Lao, Yao, などと、直接バーターによって蜂蜜、蜜蠟、籐材、柴薪、むしろ、籠細工などと引き換えに、タバコ、稲米、食塩、食肉、中古衣料、各種刃物などを入手していること、そしてこの交易が通常は交易相手の種族の村落で行なわれ、中間に中国系商人が介在することはごく稀であることなどを報告している [BERNATZIK 1938: 153-154]。ただしこれが、いわゆる《沈黙交易》に該当するものかどうかについては、これまで関連した報告に接していない。また、前節で述べたように、Yao や Miao がほぼ完全に貨幣経済の段階に達している現在、彼らを取引き相手とする Mrabri が、今なお純然たる物々交換のみに依存しているかどうかは、検討の余地がある。

### 3. 鑄造貨幣 (1502)

1) 別掲の「民族・文化項目マトリックス」によると、鑄造貨幣を用いる民族は、57を数える。さらにそのうち30民族が、物々交換も並行して行なっている。この事実をどう解釈するかは、個別に実態を調べる必要があり、単純に貨幣経済への移行過程と見るわけにはいかない (次項参照)。

2) 多くの部族的少数民族の間では、各国の現行通貨にもまして、植民地時代の鑄造貨幣 (特に銀貨) が今なお重要な役割を果している。たとえば北タイの山地民族のもとでは、婚資その他の儀礼的な取引の決済に際して、中国やインドの古い銀貨が当てられるのが通例である。また多くの婦女子は旧インド銀貨を着衣に縫い付けて装飾とすると同時に、蓄財の一手段にしている [量 1978: 188]。なかでも早くから銀本位制を採ってきた中国の影響を強く受けた Yao や Miao は、通常取引で得た現行通貨を、なるべく速やかに馬蹄形や長方形の旧中国銀貨に換え、資産の保全を図る傾向が強い。

いずれにしても Burmese, Vietnamese, Siamese, Javanese などの国家構成の主体をなす民族以外の部族的民族のもとでは、自前の貨幣は鑄造されていない。ちなみに北タイの山地民族の間では、鑄造貨幣を都市の金融機関に預金して利殖を図るという観念は、まだ浸透していないように思われる。

2) 「民族・文化項目マトリックス」の中では、Mrabri に物々交換があるか否かについては空欄のままになっているが、筆者独自の文献サーヴェイの結果、この民族が独特の物々交換を行なっていることが判明したので、あえて注釈を示した。

#### 4. (貨幣としての) 子安貝 (1503)

1) 東南アジアに限ってみれば、《貨幣としての子安貝》を用いる民族は、Tai など5民族が検出されたが、その中に Khasi, Angami Naga, Lamet が含まれていることは、ハイネ＝ゲルデルン (Heine-Geldern, R.) の次の見解と矛盾すると思われる。

「貨幣としての宝貝の使用は、常に後印度（ビルマ人、泰国人、ラオ人）とフィリピン群島の文化諸民族に限られていたように思われ、これらの地方の一部においては、最近に至るまで維持された」（強勢竹村）[HEINE-GELDERN 1923: 906-907, [訳]: 348]。

これは、子安貝の資産的特質を貨幣とみなすか否かによって、意見が分かれるところであろう。

2) 周知のように、財貨を意味する漢字の多くに「貝」という字が含まれていることから、中国では古くに貝貨が通用していたと見る向きもあるようだが、それはあくまで想定であって、決定的な証拠はまだ提示されていないようである。

ただ、その中であって注目されるのは、雲南の原住民文化である。というのは、かの石寨山古墓から出土した貯貝器もさることながら、かつてこの地域で宝貝(子安貝)が貨幣として用いられたことを示唆する2, 3の史料があるからである。例えば、馮承鈞訳・シャリニョン (CHARIGNON, A.) 註による『馬可波羅行紀』の雲南<金齒州>の条には、「其貨幣用レ金、然亦用ニ海貝。」とあり、十三世(元代)に雲南の金齒州(永昌附近)を通過したマルコ・ポーロが、その地で金貨と共に《貝貨》の通用を確認したことが知られる[馮 1954: 473]。

そして、雲南では、少なくとも明代までは宝貝が通貨として流通していたと見てよい。例えば、明末の本草学者・李時珍撰『本草綱目』<貝子>の条に見える「古者貨レ貝為ニ宝亀一、用為ニ交易一、……今独雲南用レ之、呼為ニ海肥一。」<sup>3)</sup> という記述などはさしづめこの推測を裏づける有力な傍証とみなすことができよう。ちなみに<海肥>という名称については、清・郝懿行撰『爾雅義疏』に、「肥者、雲南人呼レ貝為ニ海肥一、肥、貝声転也。尤侗暹羅竹枝詞云、海肥壳買解香烧、注、行錢用肥、肥、与レ肥、皆肥之別体。」<sup>4)</sup> という注釈がある。

以上に列挙した諸史料によって、①雲南(永昌附近)では、明代まで子安貝(宝貝)

3) 諸橋轍次著『大漢和辞典』(修訂版、大修館、1985年)第6巻、1172頁、《海肥》の項所引の出典による。

4) 同上

が貨幣として通用していたこと、②雲南現地では、子安貝を一般に〈海肥〉(haipa)と呼んでいたこと、そして③〈肥〉は〈肌〉と共に〈蛸〉(pa)の別字体であり、いずれも〈貝〉(pei)の転音であること、等々の知見が得られたことになる。ちなみに子安貝(寶貝)の中国名には、このほかに〈貝齒〉、〈白貝〉、〈大貝〉、〈紫貝〉などの異称がある。

3) ところで内陸奥地の雲南で子安貝が貨幣として流通していたとすると、その供給源と運搬ルートが問題になる。例えば、杉本直治郎は、かのマルコ・ポーロが見た貝貨は、もっぱらインド洋上のモルディヴ群島産のものが、ベンガル、ビルマを経てもたらされたと言っている[杉本 1950: 31-36]。それに対して柳田国男は、雲南はともかくとして、少なくとも雲南の南のやや海よりの地域では、沖縄が子安貝の重要な供給地であったと推定している。すなわち柳田は、「シナ大陸ではずっと昔からこの寶貝を非常に珍重して、貨幣や衣装につかっていた時代がある。ところが、この貝は産地が非常に限定されていて、大陸周辺の海では採れない。一番手近な所は沖縄である。……古い文献を見ると、沖縄から絶えず何万、何十万いう数の寶貝即ち子安貝をシナに貢いでいたことが記録されている。現に明代には琉球から海巴(寶貝、子安貝)五百五十万個を進貢した旨が目録に出ているくらいである」(強勢竹村)[柳田 1964: 395]と述べている。

ただし、柳田が「大陸周辺の海では採れない」と言ったのは、いささか速断で、例えば、宗・周去非撰『嶺外代答』巻七〈宝貨門〉の項には、「海南有二大貝一。円背而紫斑。平面深縫。……本草謂之紫貝一。……大理国以為一甲冑之飾一。」<sup>5)</sup> という記述があり、宗代に海南島産の寶貝が、雲南・大理方面に運ばれていたことが窺える。

しかし筆者は、それよりもむしろ、明朝に貢納された子安貝が沖縄側の史料に「海巴」の名で記録されている事実に注目したい。

〈海巴〉が前述の〈海蛸〉もしくは〈海肥〉などと同義同音の別体字であることは言うまでもない。そうとすれば、遙か東涯洋上に浮かぶ沖縄島でどうして雲南固有の〈海蛸〉系の方言が記録されたのであろうか。それについて筆者は、やはり沖縄産の子安貝が雲南まで運ばれたと考えるのが、最も自然であるように思われるが、今後の究明に待ちたい。

4) 〈海肥〉(子安貝)のことを論じたついでに、貴州省のいわゆる Cowrie Shell Miao について若干触れておきたい。ミッキー(Mickey, M.P.)によると、この Miao

5) 《国学文庫》第42編所収、〈拠知不足叢書重印〉鉛印本『嶺外代答』(北平、1937年)98頁より引用。

の一派は、通称 Hai-p'a Miao (Miao who wear cowrie shells) の名で知られるというのであるから、[MICKEY 1947: 7]、漢字で表わせばおそらく〈海巴苗〉または〈海肥苗〉もしくは〈海肥苗〉のどちらかであろうと想定される。ところが、この Miao は、同じくミッキーによると、少なくとも今日では子安貝を貨幣としては利用しておらず、単に婦女子の装飾品として用いているにすぎないという [MICKEY 1947: 7]。ちなみに、貴州の Miao に関する基礎資料として定評のある『貴州通志』、『黔南職方紀略』、『黔記』、『黔南苗説』等には、このサブグループに同定しようような名称は、目下のところまったく検出されておらず、ミッキーが Hai-p'a Miao という名称をいかなる典拠から得たかは、一種のミステリーとなっている。

## 5. 常設市場 (1507)

1) ハイネ＝ゲルデルンは、「整頓した市場は僅かな地方にしか存在せず(たとえばカチ族のところや Batak 族のところやセレベス島中部の一部)、それも多分高文化の影響に帰せられる……」[HEINE-GELDERN 1923: 906, [訳]: 347] と述べているが、それは中国南部についても、ほぼ当てはまる。すなわち Miao や Yao が利用する最寄りの城鎮の常設市場は、ほとんど例外なく漢民族の主導のもとに運営されている。

2) 筆者が1983年及び1984年に中国広東省連南瑶族自治县を訪れた際、県治三江鎮で開かれていた市場は、かつては定期市の性格を帯びていたらしいが、今日ではほとんど連日、市が立ち、事実上常設化していた。

## 6. 定期市 (1508)

1) 中国南部では、一般に定期市のことを《墟》ないし《墟市》、《墟会》などという。《墟》は必ずしも漢民族の独占に委ねられているわけではなく少数民族も積極的に参入している。《墟》は城鎮内で催されることが多いが、時として郊外に立つこともある。それに関して牧野巽は、次のように興味深い所見を述べている。

「広東地方にいった時に、最もはっきりと感じたことであるが、あの地方では市場が村落内に存在することもあるが、しばしば村落と村落との中間の道路の交叉点に開かれる。その市のありさまは、市が開かれる時だけ賑やかであるが、市が終わって人が散ずると、そのあとは何もなくて、ただ広場があるだけである。この地方で市場を

墟というのは、人が散ずると、後は虚しいからであると説明されているが、この語源論の正否は別としても、市が村落の中間の人家のない所に開かれるのは、それが村落内の交易よりは村落間の交易を主とすることを示すものであろう」(強勢竹村) [牧野 1952: 7]。

けだし40年後に、筆者自身が同じく広東省内で実見した状況も、これとほぼ趣きをひとしくするものであった。ただし、このような型の定期市が、中国南部に固有のものであったかどうかについては、今後の検討課題であろう。

2) 広西の Miao と Yao の《墟会》については、劉錫蕃が詳しく報じている [劉 1934: 178]。